

平和委員会の地道な活動に敬意を表します。

私こと、過去、約30年間にわたってラサール神父様と共に、「沖縄・生と死と老いをみつめる会」を主催してきました。「生と死」のテーマに「老い」の問題を含めて、毎月の定例会と年に数回の講演会を企画し開催してきました。

人の「生と死」のテーマを深く追い求める姿勢を「縦の軸」としますと、人間関係、政治・経済、環境の問題等との関わりの中で、「生き方」「在り方」を考え、追及し行動する姿勢を「横の軸」として捉えてみました。この「縦」と「横」の軸は、互いに交錯しながら、その接点でもって十字架を背負って生きることになります。

平和委員会の取り組む辺野古の問題は、軍事力の強化、つまり「抑止力」でもってしては、真の平和を実現することはできないであろうことと、「自然破壊」の観点からも阻止しないといけないものと考えております。

自然破壊の観点からしますと、過去に名護の街で過ごしたことがあり、変わり果て、シャッター街と化した現在の名護の街から考えますと、果たして、海岸線を埋め立てて「21世紀の森」としたこの施策は、真に正しかったのであろうかと疑問に思っております。日本列島改造論なるものに踊らされて、貴重な海岸線を埋め立てた時代がありました。

今回は、日常診療の現場からの考察です。診療の現場は、多くの患者さんとの出会いの中に、貴重な物語が展開されていきます。医療を提供する以上に、患者さんから多くのことを学ぶことができました。

担当した「ハンセン病の患者さん」、「部落の患者さん」からは、人を差別してはいけないことを教えてもらいました。出会った「神経難病の患者さん」は、人は一人では生きては行けない。助け合って、支えあって生きることの大切さを教えてくれました。30数年、肺がんの診療に従事してきました。多くの「肺がん」の患者さんから、「時」を、「時間」を大切に生きることを教わったような気がしております。

自分史、「視覚障害者の手となり足となりて～中村 文の百年～」には、「生きる意欲は、自らの内部からひとりで生まれるのではなく、それを期待して待っている人の存在によって引き出されるのではないか」と記されています。映画「あん」の主人公、元ハンセン病のおばあさんはつぶやきます。「私たちは多くの富、高い地位・名誉を得るためにこの世に生まれてきたのではない。喜怒哀楽、悲喜こもごもの現実を見て、聞いて、味わうために生まれてきたのだと・・・」。

大切にしているマザー・テレサの言葉でもって結びます。「思考には気をつけなさい、それはいつか言葉になるから。言葉にはきをつけなさい、それはいつか行動になるから。行動には気をつけなさい、それはいつか習慣になるから。習慣には気をつけなさい、それはいつか性格になるから。性格には気をつけなさい、それはいつか運命になるから」と、あります。

「運命」もまた、多くの出会いの中から生まれてくるもので、振り返ってみると、後ろからついてくるもののような気がしております。「縦軸」と「横軸」の接点で、可能な限り十字架の秘める意味を求めて行きたいと考えております。感謝。

(2020年2月 平和委員会講演要旨)